

みめぐみの

第40部



みめぐみの

第40部



15

大谷光道著

目次

親鸞聖人の法流 2

心の伝承 5

質疑

1. 二つに分かれている。
どちらへ行けばいい? 10

2. 少数派。兄弟は?

仲間を増やす方法

3. 分かれた原因 14

4. 将来のこと 21

読者の貢 27

法要のお知らせ 30

あとがき 31

親鸞聖人の法流

今日は名古屋から遠路、ようこそお越しくださいました。昨日までがんがんと照りつける猛々暑が何週間も続いたので、今日の天気はまさに慈雨じうと言ふしかありません。この台風が被害を出さない程度に日本を涼しくしてくれるといいなど、願っております。

最近テレビとか新聞を見ていると、ニュースの大部分が民主党の代表選のことです。それに関連してもつと気になることがあります。それは、「政治



「主導でなければ」とか「天下りはいけない」とかということで、官僚を「諸悪の根源」とするのが是とされる風潮があることです。そこまで言うなら、「官僚をなくしてすべて政治家だけでやれるのか」と、疑問を持つのは私だけではないでしょう。むしろ、このまま政治主導ばかりに走っていくとやがて独裁になると心配する声もあり、マスコミがしきりに取り上げて「役人＝悪者」の風潮を作つているとのみ言つていられません。

長い間勤めたベテランの役人がそれぞれの道での能力を生かしてくださることも大事なことではないかと思います。何事も一つの流れができてしまうと、それと違ったことを言うと変な目で見られるのが世の常のようですが、物事はどうやらかに極端に傾くと危険です。

本来佛教徒は「中道」^{ちゅうどう}でなければなりません。もつとも、佛教でいう中道とは、両極端の真ん中を行けばいいというような中途半端な中道ではなくて、両極端を離れてさらに超えての中道であるという、高度な中道を要求してい

るのですが、いずれにしても、私たちは個々の見識をもつと大切にして、静かに物を見られるようでありたいものと、最近強く思います。親鸞聖人は、「お念佛の信心をいただくことによって、生きているうちに十種の御利益をいただける（『教行信証 信の巻』）」と教えられております。その御利益の一つが、あらゆる徳が私たちの身に備わるということで（至徳具足）、「静かに物を見ていくる」という徳は、この御利益に含まれるものと言えましょう。

ところで今日は、「親鸞聖人の法流」についてお話しするようになるとのことです。一口に法流と言つても、理論や理念ということになると、多くの考え方がある存在するでしょうし、現実のあり方としても、真宗十派などと言われるようにならうもの派があります。ここでは、昔から東派、東本願寺、お東と言われてきた流れに即してお話を進めましょう。

皆様方は、朝日カルチャーセンターで、今日までに『歎異鈔』の前半を各

章六回ずつ聽講なさつてはいるとのこと、また、『いづれの行もおよびがたき』（拙著）もすでにお目通しをいたいでいると伺っております。それで、わかりきつておいでになることを長々とお話しするよりも、どんどんご意見とかご質問をいただきながら、できるだけ気楽にお話を進められたらと思います。

では、最初にさらっと要点を申し上げて、お話の入口といたしましょう。

心の伝承

親鸞聖人がお説きになつた浄土真宗は、その後、父・先代まで二十三人の歴代たちが伝えてきてくださつて、ご承知のごとく、不肖この私が現在本願寺第二十五世の法主としての立場にあつて、教えの上での責任を持つております。「正しい教えをそのままいただいて、そのままを少しでも多くの方々に伝えて信心を喜んでいただく。そして、後の代に委ねていく」というのが

歴代の仕事であつたように、それがそのまま私の仕事でもあります。

親鸞聖人から今日に至るまでには、各歴代法主と共に、それぞれの時代において数限りない皆様方のご先祖が正しい教えを守り支えてくださつた訳ですが、それには、中には命がけで、文字どおり命を落としてまで正しい教えを守り通してくださつたという、厳しくも尊い歴史をいつも思い起こさなければなりません。

その教えというのは、確かに文字としても残されています。そして、



9月8日、名古屋朝日カルチャーセンターの皆さんと親しく座談

その残されたものを読めばマスターできるという理屈は、一応あるかも知れません。しかし、教えは「文字の伝承ではなくて心の伝承である」のです。本願寺第三世・覚如上人は、「迷いを越える道はお経やその注釈書に書いてあるが、ひとりでそれを読んで理解しようとすると、必ず誤る危険があるので、師の口伝がもつとも大切である」と教えられました。

それ聖道・浄土の二門について生死出過の要旨をたくはふること、
・論・章・疏の明証ありといへども、自見すれば必ず誤るところあるに
よりて師伝口業をもつて最とす。（『改邪鈔』）

師匠から弟子への口伝えによるというのは、弟子に大切なものが確かに伝わったかどうかを師匠が見届けられるということです。信心のありかたは、その人のふだんの言動を見ていればよくわかるものなので、それによつて師匠はアドバイスできるのです。「自見すれば誤る」ので「師伝口業を最とす」と覚如上人が仰るのはこのことで、独りよがりの信心は生まれやすく、

たいへん危険です。「どこまでが正しくて、どこから先が怪しくなる」のか、ということが、浄土真宗ではきわめて大切なことで、師匠に適切なアドバイスをいただくことが肝要です。変わらない、正しい信心が伝えられていく様子は、あたかも一人の人間が何百年も生きているかのようなものだとも言えましょう。

教えが不变であるためには、教えの入れ物、すなわち生身の人間が、つまり、私たち、皆さん方がしつかりしていなければなりません。

建物があり宗門としての組織もあって、外見は教えが伝わっているように見えても、それが曲がった形で伝わつたり残つたりしていたのでは、ご先祖に申し訳が立ちません。色々と考えると、教えを伝える、守る、いや最低限「残す」ということがいかに困難なことであるかがじわじわと身にしみてくるのです。

先代の時代に、「真宗大谷派」という旧東本願寺を本山とする末寺の組合

組織の中で、教えの上で違つたことを唱え、広める人たちが出てきて、たいへん先代は苦労を重ね、それを是正するため色々な方策は採られたのですが、いざれもうまくいきませんでした。やはり何事も一つの流れができてしまうと、それを変えるということは容易なことではなく、あるいは不可能なこととすら思われます。

下京の駅前のあの本願寺から出て別の所に拠点を作らないと、もちろんそれは一からの大事業で、とてもたいへんなことではあるけれども、それをしないことには、もう本来の流れを生き返らせることはできない、という結論に達しました。そしてそれを試みる半ばで御遷化ごせんげということになってしましました。「あと、よろしく頼む」と、この短い言葉に詰まつたまことに重い荷物を置いて往生されました。「そうか、やらんならんのかな」みたいなところから始まつたのが私の仕事です。

幸い、多くの方々に熱烈な合戦いうりきをいただき、御覧のように御堂の建築が進

んでおり、来年五月に落慶法要を行う段階になりました。お帰りの前に、工事の状況を御覧いただければと思います。

質疑

では、そろそろ質問などいたいたほうが、あまり皆様のかゆい所を外れずに時間が使えるかと思いますので、ご意見でもご質問でも宜しくお願ひいたします。

1・一つに分かれている。どちらへ行けばいい？

〔Q〕 私は勉強し始めて、こういうふうに大谷派が分かれていることを初めて知りました。今までは、「君は何派だ」と聞かれたら「真宗大谷派だ」とか「東本願寺だ」とか何とか言つていましたが、よく聞いてみるとそれもなくなつてしまつて「真宗本廟」しんしゅうほんびょうとかになつてね、こっちの本願寺と分かれなくなつてしまつて

ているようなのです。われわれ末寺の門徒衆は、今後どちらへ行くとか、お寺の住職からそういう説明も何も聞いてないし、われわれ何をしたら、どうしたらいいんかなと、不安でしようがないんですけれども。今後どういうふうに展開されていかれるのか、お聞きしたいのです。

〔A〕 まず、全国の多くのご門徒に、いきさつと両者の違いをわかつていただきのに、私だけの努力ではとても及びません。少しでもお力を



内装工事が進む本堂一階の参拝接待所

貸していただければ非常にありがたいです。そこで、私共のほうは「違うんだ」と言いますけれども、あちらのほうは「少数派の者が何か言っているだけだ。耳を貸す必要などない」ということで済まされて終わりになってしまふので、しつかり中身を理解してくださった方が少しずつ増えていくということを望みつつ、たとえば今日のようなこういう機会をどんどん見つけて、何もここだけでなく私がどこへでも出かけて行つてでもよろしいんで、お話をさせていただくななど、これは地道な努力しかないと私は思います。

それから、どちらにすれば良いかというお尋ねですね。これは我が国は信教は自由なので、ご自身でお選びいただくことになるのですが、私のほうは「絶対間違いがない」と自信・確信に満ちていることをおわかりいただけるはずで、自ずと答えが出るものと思っています。

〔Q〕 地方の者がここへ直接アプローチするわけにはいかんわけですからね。話や質問が地方の末寺を通して上がってくるんだと思うのですが？

〔A〕 通していただいても結構ですが、もちろん直接でも結構です。実際、直接訪ねて来られる方もあります。その都度、詳しくご説明しております。

ただ、仰るように、「直接アプローチするのは末寺に対しても遠慮すべきだ」というお考えと、先のご質問のように、「手次寺（末寺、菩提寺、皆さんが檀家となつておられる寺）の住職が自分たちに説明してくれてしかるべきだ」という思いの間に挟まつて悩んでおられたことがよくわかります。それは、手次寺の住職を信仰上の指導者として頼りにし、大切にしておられるからに他なりません。そのようなご門徒の信頼と期待に応えるべき義務と責任があるのが、手次の住職というものでしよう。

このように「住職の説明責任」は、それが信仰にかかわる問題であるならばなおさらです。今のように、私どもの本願寺と真宗大谷派という両者について違がある場合は、そのいずれを選ぶかは別としても、ご門徒に説明し、考える機会を持つてもらうようにすべきでしょう。ただ、何よりもその前に、

信仰の上から自分自身の信ずる教えはどうなのかを明確にすべきで、それを曖昧にしておくのは、一宗教者としてのあるべき姿ではないと思ひます。

しかしまず、二者にこのような違いがあることを知らない住職のほうが、今のところ多いのかも知れません。

2・少数派。兄弟は？ 仲間を増やす方法

〔Q〕 民主党の代表選にたとえられて、今のお立場を話されてるような気がするんですが、カルチャーセンターの先生に聞いたお話では、「うちのほうは、本願寺の中で非常に少数派で一割か二割ぐらいしかいない」と。そういう中で色々考えてみるんですが、一つには、数が多くないと流れは中々変えれないというのが現実だろうと思うんです。ご兄弟に「男とか三男とかお見えになられるそうなので、もし同じ様な志を持つ人だとしたら、できるだけ……。そのへんの所はどんなふうにお考えですか？」

〔A〕 それは兄弟の話をすればいいんですか？

〔Q〕 ご兄弟の話もそうですが、他の仲間を増やす方法としてどういうふうに考えていいかるのか？

〔A〕 中身を全部わかつていただいて、さらに仲間を増やすところにまでお考えを及ぼしていただくとは、ものすごくありがたいことです。

兄弟は六人。兄三人、姉二人で、私が全部の末っ子です。一番上の兄は東京本願寺の住職でしたが、昭和六十三年二月、独立を宣言して、真宗大谷派からも先代の父からも離れてしました。その後、平成十一年十二月に亡くなり、今はその次の代になつてます。一番目の兄は、主として東山淨苑という納骨施設を経営する本願寺維持財団という財団の理事長です。三番目の兄は、真宗大谷派の門首という地位に就いております。

父は、生前、真宗大谷派との長い争いで、満八十九歳で亡くなるまで、兄たちの協力のない孤軍奮闘を強いられました。遺書にはその状況を述べて、

「跡を暢道（現・光道）に相続させる」と書かれています。

……この暢道こそ廿五世の伝承者たり得る者にして将来必ずや勝法宣布する事大なりと信ず。こゝに血脉廿五世及び大谷家の系譜墳墓の所有權等宗祖聖人以来の祖先の祭祀を主宰すべきものに左の者を指定す。

住所……

四男 大谷暢道（昭和二十年一月廿五日生）

二 予の全財産を四男大谷暢道に相続せしむ。

住所……

遺言者 大谷光暢（明治三十六年十月一日生）〔印〕

東京本願寺はすでに数百の末寺もあつて「東本願寺派」という宗派を形成しています。ご質問にある「同じ様な志を持つ」ということについて、私の

考えからすると、「親鸞聖人から今日まで歴代の法主が伝えてきてくださった正しい教えを広める」志を持つているかどうかが基本になるのですが、そのことについて、未だ確認ができていません。つまり、教えの上でどのような路線を取っていくつもりなのか、たとえば、真宗大谷派の唱える教えに対する見解や批判は、兄の時代からも聞いたことがないのが気がかりです。これが、私の情報不足であればと、願うところです。

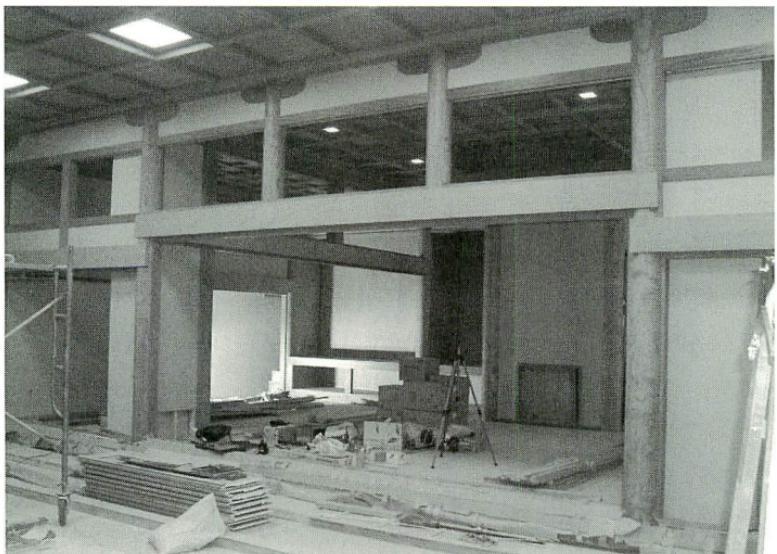
また、三兄は真宗大谷派のトップの形ではあっても、ご承知のように門首というものは象徴なので、全く発言権のない立場で、あらゆる言動が許されていません。

残念というか、身内が一丸となれないでいるのはお恥ずかしい限りですが、兄たちと、今すぐ「じゃあ、このようにして協力しよう」、というのは難しい状況にあります。いずれ何かの形で協力できるようなことが、というか、縁をみつけることになれば、とは存じています。

それと、何でした？

〔Q〕 末寺の多数は本廟（真宗大谷派）のほうで本願寺派が少ないとということですけど、どう取り込んでいくかというのは中々難しいかもわかりませんが……。

〔A〕 さきほどもお答えしましたが、多くのお寺さんが、ここの中願寺のことをどれほど知ってくれているかは、よく掴めていません。ただ、平成十八年一月に全国の大谷派寺院（末寺）に宛ててご挨拶の手紙を送つたので、少なくとも、ここ嵯峨の



壁や天井も整えられた本堂の内陣と外陣

地に新しく本願寺があることについては知れ渡つてゐるはずです。

御堂の建築や落慶、新門の得度や結婚などは、一般のマスコミにも馴染むなじむので、記事になつて少しずつ伝わるのですが、宗教的な内容は『中外日報』や『仏教タイムス』などは別として、一般紙の記事には馴染みません。「うるさい」と言つて音量を下げるのがテレビのコマーシャルですが、大企業がたつた一つのことを知らせるのに、どれだけのエネルギーとどれだけのお金を使つてゐるか、自分のことに引き当ててみると、物事の周知徹底の難しさが感じられます。

〔Q〕 伝えるという事が無理というか、大変難しいということにますますなつていく訳ですね。

〔A〕 これとは別に、私どものことを知つていても、「そういうややこしいことに触らずに日常が流れていけば、それでいいわ。それが一番いいわ」ということで過ごしている人もずいぶんいると思います。「真宗大谷派の執

行部の言うことが正しいと信じる。その通り私は邁進するのだ」という信念を持つている人は、どれだけいるのでしょうか。どっちでもいいとか、どちらにも近寄りたくないという人が八割九割、もつとも知れませんね。

たとえばこんなことがありました。私があるお寺の行事に行き、車から荷物を降ろしたりしているときに、黒衣姿こくいの人が通りかかって、親しそうな顔をして挨拶されるんで、どなたでしたかとお聞きしたら、私とは初対面だけど、その方の先代か先々代が、うちの先代か先々代かの勉強のお手伝いをしてくれた方なんだというのです。お礼を言つたり、さらに色々お聞きしようとしたのですが、「私は大谷派ですから。私は大谷派ですから」の一点張りで、小走りに逃げるようにして行つてしまわれました。

こういう方が一つの典型ではないですかね。私とつきあう、つきあうままで行かなくても、話をしているのをだれかに見られるだけで、何かいやな目に遭わされるのでは、という先入観を持つていられるみたいでね。「そんな余

計なことはしたくない。要らん雑事を増やしたくない」ということでしょう。

他方、大谷派の末寺の方がここへ来られることも時々あります。中には「本当に行つてもだれかに見つかへんやろか」みたいな心配をしながら来られる方もあります。私は個人の秘密は厳格に守るほうなので、心配は要らないんですがね。

3・分かれた原因

〔Q〕 私の所（家）は浄土宗なんですが、普段のカルチャーセンターの行事には出てなくて今回が初めてなんですが、そもそも分かれた本当の原因は何なんですか？その辺から勉強しないと……。

〔A〕 教えの違い、信心の違いが二つに分かれた最大の原因です。

父の時代から、いや一番元はもつと古いのですが、教えの上で違ったことを言い出す人があつて、はじめはあまり派手に活動すると、少数派なので自

分たちが追い出されると思つてか、こつそりと手を広げながらだんだんと仲間を増やし結社を作つていつた。それで、宗議会しゆうぎかいという議決機関の多数を獲得し、内局という執行機関を握つた。それでもまだ思想的というか信仰上の中身ができるだけ表に出さないようにしてきた。今は少しづつ出してきますが、それでもご門徒にはほとんどその内容は伝わっていない。

皆さんは「往生」と言うと、どんなことを思い浮かべられますか？「この世の命が終わつて（死んで）極楽に行つて生まれ変わる」ことです。これは「往生」という日本語の意味だからしても明らかです。ところが「生きているうちに往生するんだ」というのが真宗大谷派の教義になつてゐるのです。そして、私たちは極楽に往生すると、そこで成仏（仏様になる）するのですが、「今往生するのだ」と主張する真宗大谷派の教義からすると、今生きながらにして仏様になつてしまふのですから、煩惱もなくなつて後光がさしていて、見る人は手を合わせたくなるはずです。

今のご質問の主は浄土宗、知恩院さんだと仰いましたが、浄土宗であれ浄土真宗であれ、そのような宗旨云々を問題にする以前の話だとおわかりいただけるでしょう。もちろん、真宗大谷派以外の、西本願寺（本願寺派）をはじめとする浄土真宗他派では皆、往生は「この世の命が終わってから」のこととで、「生きているうちに往生する」と教えられているところは、一つもありません。

今日のようなこういう場面だけでなく、できればもっと広く公の場面で、真宗大谷派の人達と議論をしたいのですけれども、そういうところへは出てきてくれません。「少数の者が何か言っている。そんなもの相手になるな」ということなのでしょう。

4・将来のこと

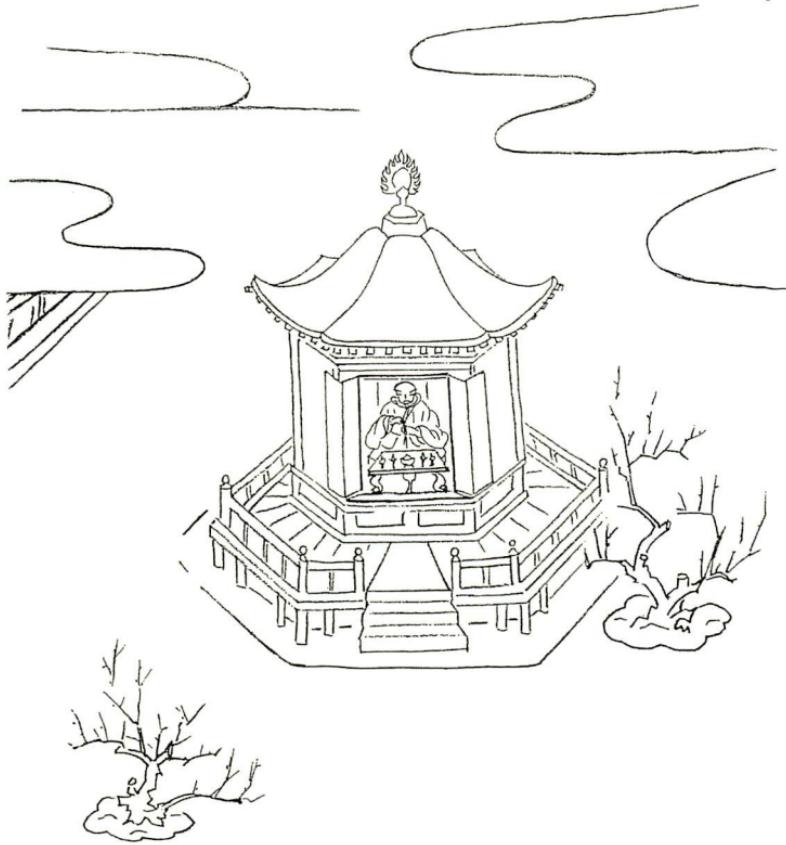
〔Q〕 ゆくゆくは、やはりまた駿前（真宗本廟）に戻られるんですか？

「A」 うーん、それは考えたことないですがね。ありえないことです。少なくとも私の代ではありません。あと三代～五代先のことまでは、私には見届けられませんけども、まあないでしよう。

今日は、長時間に亘つて貴重なご意見やご質問を頂戴し、その上、反対に大切なことをたくさん教えていただき、まことに有り難うございました。またさらに、「仲間を増やす」ために熱いお気持ちを頂戴して、深く感謝申し上げます。

ただ、せっかくのお志に水を差すようですが、「数」に囚われすぎる^{とら}ことは正しいものを見失う危険につながります。私どもは親鸞聖人の正しい教えに立脚しているのです。七百年前の草創期の本願寺は親鸞聖人の御真影だけを雨露から護つた六角堂だつたことを想い出しましよう。お互に自信を持つて着実に歩いて行けば、必ず将来は開けてきます。いや、すでに開けてき

ています。



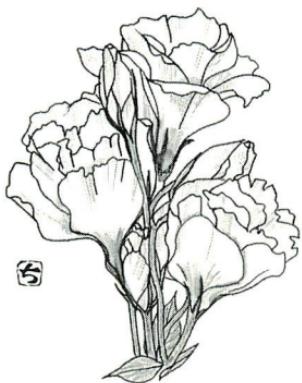
図

草創期の大谷本願寺は親鸞聖人の御真影を雨露から護る六角堂から始まった

—筆者追記—

これは、去る九月八日、名古屋朝日カルチャーセンターの歎異鈔講座の方々が本願寺においてになつた時のお話に筆者が加筆したものです。ここでは誌面の都合から「親鸞聖人の法流」に関するもののみとし、このほかいただいた、多くのたいへん貴重なご意見やご質問は、別の機会に何らかの形でご紹介したいと思います。

(『いづれの行もおよびがたき』、第二十九部、第三十一部 参照 編集部註)



四

質疑応答

富山県 河合 寛さん

問

みめぐみのを通して御教えを頂き、ありがとうございます。御文五帖を毎朝、順番に拝読しているのですが後生ということがたびたび説かれています。後生と後世との意味をはつきりと頂戴したいのです。説教、法話を聞くことも多いのですが、今、私の身にどういただいたらよいか、この点について御教示ください。

南無阿弥陀仏

合掌

答

熱心に信心を求めておられるお姿に、いつも頭が下がるばかりです。

何冊かの辞書を調べてみましたが、後生ごじょうと後世ごせは前生ぜんじょう、前世ぜんせいと同様、今日まで同じ意味で使われてきているようです。ここに今生こんじょう、今世こんぜを加えて、過去、現在、未来について「世」を使った言葉のグループと「生」を使った言葉のグループがあります。

したがって、後生と後世はその人の言葉の使い癖の違いとしか考えられません。

前世、今世（現世）、後世（来世）

前生、今生（現生）、後生（來生）

ただ「後生」といえば「後生助けたまへ」と仰った蓮如上人のイメージ、「後世」といえば、「山を出でて、六角堂に百日籠らせたまひて後世をいのらせたまひけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文を結びて、……」の恵信尼公のイメージが、私には出できます。極楽と言うか浄土と言うか——この場合は固有名詞（極楽）か一般名詞（浄土）かの違いはあるものの——のように、同じ意味に使われています。

ところが、後世を後世（こうせい）と読むと全く意味が違つてくるので、おそらくこの意味でのご質問だと思います。後世を「こうせい」と読めば、後の世、後の時代、子孫などと、全く別の意味で、「この世の中の将来」といった客観的な意味になり、後生（ごしょう）、後世（ごせ）は主観的に「自分自身が生まれていく世界」です。

この世の中に残していく子や孫が安穩に幸せに暮らしていくてくれるということは大切なことです、同時に「この私がどこへ行くのか」という後生は、まさに一大事



指宿 京 ちゃん (小4)

河合さんの毎日繰り読みされている『お文』に繰り返し説かれているように、「後生の一大事」こそ浄土真宗のもつとも要になるところです。浄土真宗はひと言で言うと、「次に生まれるところが阿弥陀様の極楽淨土であるということを自分自身にはつきりさせる」とによって、今、この世での生活も活きてくる」ということですから、後生をはつきりさせることがもつとも大切なこと（一大事）なのです。

です。

読者ギャラリー

法要のお知らせ

	午前八時	A:午前十時半 B:午前十一時	A:午後二時 B:午後二時半
16日		御遷座法要 B	本堂落慶法要 A
17日			大遠忌法要 初逮夜 A
18日	晨 朝	初日中 A	逮 夜 B
19日	晨 朝	日 中 A	結願逮夜 B
20日	晨 朝	結願日中 A	

うけつたへ／＼して友がきと

御名となへつ、あゆみつゝけむ

(智子前裏方の御歌)

長年、待ち望んでいました本願寺本堂の建立工事もお陰様で最終段階を迎えております。

さて、かねてよりお伝えしておりました宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要並びに本堂落慶法要の日程が上記の様に決まり、厳修される運びとなりました。

初夏のすがすがしい嵯峨野の地へ、ぜひ、お誘い合わせのうえご参詣下さいますようお知らせ致します。

平成二十三年五月十六日　　御遷座法要・本堂落慶法要
平成二十三年五月十七～二十日　宗祖親鸞聖人

七五〇回御遠忌法要

本願寺寺務所

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今回はカルチャーセンターで「歎異鈔」を受講されている方が本願寺にお越しになつた時の法話と座談に加筆して頂きました。「阿弥陀様と本願」はお休みです。

「親鸞聖人の法流」と題した内容は、たとえて言うなら、本願寺の入り口に立たれて中を覗かれている方を光道台下が招き入れ「ここはこんなところですよ。本当の親鸞聖人の教えはこうですよ」と、分かり易い言葉でご説明下さつたものです。

ご案内の通り、来年初夏には宗祖の七百五十回御遠忌と本堂の落慶を迎えます。淨土真宗の拠り処となる本願寺を建立しさらに進まれる光道台下の「自信を持つて着実に歩いて行けば、必ず将来は開けてきます。いや、すでに開けてきます」とのご教示にそつて皆で一歩ずつ歩んで参りましょう。

皆様からのご感想、ご質問お待ちしております。どしどしお寄せ下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円(税込)です。

○1冊～4冊=送料及び振替手数料(70円)はご負担下さい

※送料 1冊=120円、2冊=160円、3冊=180円、4冊=210円

○5冊～9冊=送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊=210円、7～9冊=290円

○10冊以上=送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です(ご住所には郵便番号をお忘れなく)。

みめぐみの 第40部

2010年11月5日 印刷
2010年11月10日 発行

定価 200円

著 者 大谷光道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株)中外日報社



みめじみの刊行委員会刊